

パーキンソン病について

今回は日本神経学会神経内科専門医の矢部勇人医師に「パーキンソン病」について伺いました。



▲矢部勇人 医師

パーキンソン病は脳の病気の中では有名で、皆さん一度は聞いたことがあるのではないかと思います。「手がふるえる病気ですよね」という声が聞こえてきそうですが、これは一部間違いです。ふるえが一番有名な症状ですが、実はふるえない人も2割程存在します。ふるえよりも困る症状として、動作がにぶくなる動作緩慢やバランスが悪くなる姿勢反射障害など

があります。そのため歩行が小刻みで、前かがみになることもあります。これらの症状があれば、手がふるえていなくてもパーキンソン病の可能性がありますので、年のせいなどと考える前に一度病院を受診してみてください。

治療としては、基本的には飲み薬での治療になります。近年飲み薬の種類も増え、治療法に幅が出てきました。病気の初期の段階では、少量の薬でも十分に効果がありませんが、病気の進行に伴い、次第に薬の効果が不十分になってきたり、効果の

持続時間が短くなり、お薬の効果が切れた時間帯ができたりするようになります。このような状況では、いくつかの薬を組み合わせ使用したり、薬を飲むタイミングを変えたりと、細かな薬の調整が必要となつてきます。近年では皮膚から吸収される貼り薬や皮下注射で用いる薬剤、胃からチューブを入れポンプを使って腸に持続的に薬を投与する方法などもあり治療の選択肢が増えていきます。昨年から持続的な薬の投与方法の選択肢として、皮下にポンプを用いて薬を入れ続ける治療

もできるようになりました。パーキンソン病が進行すると身体の動きも悪くなり、日常生活に支障を来す場合も多々あります。しかし、適切な治療により症状が改善し、日常生活を改善させることができることもあります。お困りの方は、ぜひ一度、専門医の受診を検討してみてください。

社会福祉法人 済生会今治第二病院

今治市北日吉町1丁目7番43号

<https://www.imabari.saiseikai.or.jp/site/saiseikai-imabaridai2/>

☎0898-23-0100

